

易卦爻辞象伝成立に就ての一卑見

内野 熊一郎

余永梁氏は「易卦爻辞的時代及其作者」(集刊一ノ一)を論じ、卦爻辞と卜辞の文句に近似するものあるを、比較抽出しているが、商代に八卦や筮法はなかつたとする。そして卦爻辞中に現われる民習風俗(掠奪婚・臣妾・用具・郊亭・宗法)や史実などは、周初封建時のものなることを指摘し、

従つて「卦爻辞は周公作ならず、周初卜巫官の作」とする。かくて要するに、「易は出自亀卜、周初卜巫者流所作の一部書」と結論するのである。此は繫辭伝に、「易之興也、其當殷之末世、周之盛德邪、當文王與紂之事邪」とある言説が、むやみに妄誕でもないことを示すものである。而して易が殷代亀卜から出自することについては、近時、屈萬里氏の「易卦源於亀卜考」(歴史語彙 第廿七期)に詳究されるものがあり、特に陽爻を九、陰爻を六とすることに關し、龜版の内側の区切れば九箇、外側は六箇が二列に並んでいるので、陽九、陰六は、此の亀卜版の内外側区切れの数によつたものであると説かれて、注目を惹くのである。かく

て、どうやら、易卦は殷代亀卜に起源し、周初頃には、陽九・陰六の卦爻も考えに上り、漸次卦爻並に卦辞・爻辞なども、或る程度は形成されかつたらしく、想われるのである。

然るに、郭沫若氏は、「金文無二与レ天对立之地字一、天地对立之觀念、事当二後期一、則乾坤对立之觀念、亦当二後期一矣。且易之為レ書、其本身亦有二其固有之系統一、乃於二著述意識之下一、所二構成二之作品、与二古代自然發生之書史一不レ類、其経部之成、或在二春秋以後、即孔子亦未二必及レ見、論語五十以学レ易、虽レ無二究極之證據一、以レ理推レ之、則作レ亦者為レ近レ是。……余意、易之経傳、均孔門弟子所レ為、傳之作尤在二経後一……」と述べ、易を以て春秋以後、孔子門人の作とし、孔子自身は易を見るに及ばず、論語中の「学易」は誤りである、(金文叢攷)とする。その理由は、周代金文に天と对立する地の字はなく、天地对立の觀念は後期のもの。故に乾坤对立觀念も後期に属する

し、又易は組織的叙述の作品で、古代に自然發生の書史類とは異なり、經文は春秋以後の作と見なすべきだとする。しかし、此れは一概の短見というべく、無理である。

先ず第一に、天神を帝、土神を土社、とすることは、殷墟卜辭に屢見するところ。が、直接に天・地と対立する觀念は、周代金文にはなし、とするならば、それも然らず。春秋後期か戦国初期の齊国玉秘銘文（羅氏三代吉金文存・卷二〇・四十九頁）に、「行氣」を説き、その文に、「行氣實則遙、々則神、々則下、々則定、々則固、々則明、々則聾、々則遠、々則天、天其柱才上、墜其柱才下、巡則生、逆則死」の如く言及するものがあり、此には天と地が明かに相對する觀念として現わされている。而して此の天・地は、信仰的神格化されたものからは既に脱却して、行氣（巡行する火氣）なる原質が成立積蓄され、固定表遠化されて、天・地を生成するという、原質的な意義を有つ相對的天地觀念になっている。然も天は上に在り、地は下に在り、この天地に巡（順）へば萬物は生存し、逆へば死滅する、（孟子离婁上にも「順天者存、逆天者亡、」と述べているから、當時には既に古い成語となっていたものだろう。）といひ、更に天地は行氣なる一原質から生成されるもの、と見なしている。すなわち相對的二元としての天地だけを説くのでなく、その二元的天地は「巡行する火氣一元により生成され、統合される」という体系的態度の一元

的二元觀である。それは寧ろ易繫辭傳の太極・兩儀の關係にさえ近いものであらう。當時にかような（一源的）二元相對的天地觀念が存していた以上には、ただ素朴な天地二元觀は、これより以前に存したらう、と見なすことは、必然の道理と思われる。例えば、劉康公が聞いたという春秋時代の通念に、「吾聞之、民受天地之中一以生」（左氏成十）というが如きものがあったようであるが、此は原質としての天地二元の中和によって人民が生々する、というのであり、この場合の天地は未だ一元化されず、二元相對のままのもの（原質）である。すなわち二元相對的天地觀は、春秋時代乃至それ以前から、すでに萌していた、と見て大過はないであらう。

然る時、この種素朴な天地相對觀念を、乾坤・剛柔相對觀念や、陰陽相對觀念で以て、代替置換することが、春秋前後に現われ来らうとも、不可解なことは思われない。すなわち「天地交而萬物通也、内陽而外陰」（泰象）とか、特になわち「柔上而剛下、二氣感應、以相與、……天地感而萬物化生」（咸象）などという如く、天地感交觀を、陰陽対応・柔剛二氣感應觀で代替している易象傳の思惟方式も、やはり春秋後半乃至その前後に存立した、と見なして大誤はなささうである。列子天瑞篇に「昔者聖人因陰陽以統天地」といつてある文章は、周末の文であらうが、陰陽觀念で天地相對觀念を統べ現わしたものが易である、と見るのは當つてい

る。(但し乾象伝に「乾元、萬物資_レ始、乃統_レ天。」とい
い、坤象伝に「坤元、萬物資_レ生、乃順承_レ天。」という如
き点は、やや乾主坤従の考え方を認め得るものであるが、
この意味で天地が中和交感し、剛柔・陰陽二気が感応する
のであって、二元対応観には違いないのである。且つ又、
此等の場合、天地や陰陽や剛柔をば、同義語とする如くで
あり、更に之を「二気感応」の如く、二氣と見なし、従っ
て二元的原質に考えていることは、(易卦乾坤原義に於い
ても、恐らくそうであろうが)象伝原意において、明らか
にそうであることを、知るのである。

かように考えて来ると、天地相對二元觀に基づき、易乾
坤二元相對觀念(乃至天地・剛柔・陰陽二氣對應觀念)に
よる、萬物生々變化の理法の解明と、吉凶災祥の占知予測
などが、易経文としては春秋以後、易伝文としてはさらに
その後でなければ作られ得ない、などとする郭氏説は、
あまり根拠のないことだ、と思われる。

されば、「子曰、南人有言、曰、人而無_レ恒、不_レ可_三
以作_レ巫醫。善哉。不_レ恒其德、或承_レ之羞。子曰、
不_レ占而已矣。」(子路篇)の如く言われるのであり、これは
若干の通じ難い点もなくはないが、やはり孔子の易説とい
うべく、恒卦九三爻辭を見て言つたものといえよう。又それ
らを、よしんば抹殺するとしても、最後の「子曰、不_レ占
而已矣」は疑えまい。然る時、孔子は「占う」ことについ

ては知っており、また言及しているのである。すなわち
「占う」という以上には、やはり易卦や卦爻辭も、或る程
度には具存したと見るべく、孔子頃に卦爻辭は相當に完備
していた、と推されるべきであろう。但し右の場合の「占
う」も、巫卜者が亀卜で占うの意で、易占ではない、とい
うかも知れない。そこで、当時に易卦爻と易占の既存事
實を、他の資料から論証する必要がある。

之について、周代金石文中に考拠を求めて見るに、金石
文中には占筮の筮字が、筮や蓍の字形に作られて存してい
る。すなわち史憲靈に、「王……窺令史憲路。咸。王乎、」
と見え、又小孟鼎に、「卜有_レ戕。王聿、々従。」と見え
る。而して郭氏は、「聿字舊未_レ識、以_レ文義推_レ之、當_二
是筮字、聿蓋_レ蓍之器、従_レ収以奉_レ之。」(金文並攷九頁)
と考定するから、小孟鼎のこの句は、明かに占筮した一文
である。小孟鼎は康王時の器であり、聿は説文の筮字であ
ろう。これは巫が竹箒を両手に奉拱して占う形。さて史憲
靈は穆王以後、春秋中期の器であるが、その聿字を郭氏は
筮に誤読しており、邦儒高田忠周翁は、「巫必有_二神託、
以告_二生人、从_レ口固其理也。」(古籀篇)とて、聿字と考
定された。もちろんこれが爻正であろう。かくて、周初康
王時に、亀卜を行つたが、亀卜は凶であったので、王は再
び占筮を行つたら、筮は吉だったというのである。然る
時、康王時代には、亀卜と並んで、占筮がすでに行われた

し、穆王・春秋中期には、盛行したことが知られる。而して筮とは、説文に「易卦用、蓍也。」と説明されるように、易卦につき蓍竹を用いて占うのである。すなわち筮占には、必ず占形として易卦が必然視される。すでに康王時に、「籒する」ことが存し、且つ実施された以上には、筮の占形である易卦が、相当数に成立していなければならぬ。それは、六十四卦悉くが完具したものか否かは、不明確であるが、占いに用いられて然るべき程度に、一応形成された易卦の成立が、周初康王時代に想定されねばならぬものと考える。(勿論、現存易象象伝中には、春秋末期・戦国初期に亘るものも、あるようではあるが)

以上により、やはり易卦は、殷代亀卜に起源し、周初頃には、亀卜版内外両側面の区切れ九と六(六綸が二行に並ぶ形であるので)などに示唆されて、陽九・陰六の卦爻も考えに上り、康王頃には或る程度の易卦爻や卦爻辞も形成されて来り、亀卜

と並んで易占筮が行われたろう、而して後世に卦爻辞は漸成された、と推定されよう。これは、余永梁氏が、「卦爻辞不是周公作、倒是卜巫之官作的、它的時代是周初、」(集刊一ノ一、易卦爻辞的時代)と説き、又「卦爻辞在當時一卦一爻之下、儘有不同的繇辞、後來纔刪削成為定本、所以卦爻辞有同樣的事實而分隸於不同的卦爻之下、如『帝乙歸妹』的事而見、『高宗伐鬼方』的事而見。可知卦爻辞是逐漸增易、到後來纔完整、」(同上)と論定する所に、一些の考覈を補加したものに過ぎず、それだけ、周易源流を探究せんとする作業には、余永梁氏の該論考や、屈萬里氏の論索は、必見資料となることを、銘記すべきである。而して略現存の如き周易卦爻辞象象伝などが完成されたのは、大体春秋末・戦国初期のあたりか、と想定されるのである。

(東京教育大学教養部東京文理科大学教授)